三枚のハガキが語るもの

相模原市支部　関根　伸一（子）
戦没者　関根　栄吉
戦没地　サイパン島

朱色で大きく「返信不要」これは戦死した父の生きた証として残った三枚のハガキの一枚に書かれた文字である。

昭和十九年六月一日に名古屋の駐屯地から投函されている。その後、七月十八日戦死の報が届いており、約一ヵ月後には亡くなっていた事になる。四行だけの文面は、預金通帳番号、自分が元気であること、家族に対しては体を大切にするようにと書かれてある。父は覚悟の上とはいえどのような思いで書いたのであろうか。

四月九日のハガキには「面会禁止」の押印があり出兵準備が行われていることが伺える。文面は駐屯地近くで「入学式」を目撃し、戦友達も故郷の家族に想いを馳せていた状況などが書かれている。久しぶりに世情というものを垣間みたのかもしれない。前年の二月の一通は、面会に来たときの子供のことなどについて書いてある。必ず書いてある文面は近所の知人に対する配慮の言葉であり、常に留守宅を案じていることが伺える。また、約一年四ヶ月間に投函された三通の

©2011_財団法人神奈川県遺族会

投函場所が異なっており、静岡県御殿場、茨城県勝田、名古屋市と転々としていたことが分かる。
この三枚のハガキは母の遺品の中にあったもので特に印象深いものを残したのだろうか。母が何度も読み返したためかヨレヨレになり文字も薄れ判読すら出来ない部分もあるが、父が本土を離れるまでの動向や父の深い愛を感じさせる貴重なハガキである。
父は「サイパン島」で戦死したとされているが、死亡通知では「中部太平洋方面」の戦闘で戦死したとあり、日付は七月十八日となっている。サイパン島の玉砕は七月七日とされており矛盾を感じるが、母は帰還した戦友からサイパン島への上陸までは一緒であったと聞いたようである。因みに私の誕生日は七月十五日、父は二歳を迎えたことを知り得たかは不明であるが何かの因縁を感じる。戦時であり事の真偽は質すべきもないが、父があの戦争で亡くなった事実は消せるものではなく既に六十五年余が過ぎてしまった。
戦後の混乱期に人並み以上の苦労を余儀なくされたかもしれない我々遺児も、高度成長という歴史を作りながら年齢を重ねてきた。戦後体験を含め記憶は徐々に薄らいできており「平和ボケ」とさえ言われる昨今ではあるが、消えることの無い事実として後世に伝えてゆくことも我々の責務かもしれない。
今年は戦後六十五年ということでメディアが種々取り上げていたが、果たしてどれだけの人々が注目し認識を新たにすることが出来ただろうか。解って欲しいことは、赤紙の他「返信不要」のハガキを受け取りそのままとなった留守家族が多く居たこと、そしてこれは「死への道標」であったことを忘れないでいてほしいと思う。

©2011_財団法人神奈川県遺族会